

シャウト

ゾラ・ニール・ハーストン

小林亜由美 訳

シャウトは神によるアフリカの「憑依」の名残であるということにはほとんど疑いの余地はない。アフリカにおいてシャウトは司祭や侍者を祭るもので、アメリカで一般化された。しかしながら、示唆するものは同じである。それは、魂からの特別な好意のしるしであり、一時的に個人の意識を追い出すことを選び、その表現に体を使うのである。

どの場合でも人は、憑依の間に自分の行動について無知であると言う。

大まかに言つて、シャウトは感情の爆発で、リズムに呼応する。それは、(一)歌うリズム、(二)話すリズム、(三)ハミングのリズム、(四)トムトムの音に非常に似た足のタップや手拍子によつて、呼び起こされるものである。

表現が親しみやすければ親しみやすいほど、呼応が呼び起こされやすい。例えば、「私は十字軍の兵士だ、柔和で慎ましい子羊の信奉者だ。私は王なるイエスの血に染まった旗の下で戦ってい

ると言うことを皆さんに知ってほしいのです」という文言は、話し手がどんなに仰々しくふるまうよりも、アーメンと唱えさせられそうである。恐らくこの理由は、聞き手はその意味をつかむために脳をかき回されることなく、音節の流れを追うことができるからである。多分それは、子どもが自分がよく知っている話をしてほしいと言う衝動と同様で、一語が抜けていてもその子どもは両親を正すことができるのである。

シャウトは地域社会で見られる事柄である。それは人と共にすると盛り上がる。伝道者にとって最初のシャウトを起こすのは難しいことである。その後には、教会中が炎のように熱狂しやすい。これは分かりやすいことであるが、それぞれシャウトする人が自分の熱情を他の誰かに伝えるたびにリズムが増強されるからである。

それは実に個人的である。シャウトには一般的なものがある一方、シャウトをする人は異なる形式を好きなように混ぜ合わせるか、過去にないようなやり方で自分自身を表現してもよい。

女性は男性よりも頻繁にシャウトをする。一般的に女性は男性よりも感情的であると認識されているため、これは驚くべきことではない。

シャウトをする人はいつも教会からの注目を受けている。教会のメンバーはシャウトをする人

のところへ急ぎ、座るように強要するか、状況によつてはそれを支える。時折、シャウトをする人か近くに座っている人、もしくは、両方を怪我から守るために、シャウトをする人を拘束する必要がある。時々、暴力で一発くらわして倒すことがある。恍惚の状態になるとシャウトをする人は聖堂信者席の上に登り、誰彼なしに暴力的に蹴り散らすこともある。また、時にはカタレプシーの状態になるとドサリと床に倒れ、支えられなければ怪我をしてしまう、もしくは、他人に倒れ掛かって怪我をさせてしまう。たいてい怪我をした人は、シャウトをする人が恨みを復讐していると思ひ、気を悪くする。不幸なことに、これは時々起こることだが、いつもではない。

シャウトをする人には二つの主な種類がある。…(一) 音声を伴わない…(二) 音声を伴う。中間のものもあり、ある段階では無音で、次には音声を伴う。

音声を伴わないタイプは、強烈な吐き出しや引きつりの動きを伴う。座ったままのこともあれば、上へと下へと跳ねて、大きな力で体を動かす。唇は固くすぼめられ、目は閉じられる。激しい感情は倒れて終わる。

音声を伴うタイプはより頻繁に起こる。座っている間に静かに涙を流して嘆くものから、聖堂信者席から跳ねたり、前へ後ろへと、通路を走ったりするといった抑制できない叫び声まで、あ

らゆる種類がある。抑制されなければ、説教壇まで駆け上がり、説教者を抱きしめる人たちもいる。ヒステリックに笑う発作に惹かれる人たちもいる。

事例にはさまざまな変奏がある。

(一) 説教の最中。「ええっと、ええっと」と六度叫ぶ。四十秒間の強烈な動き。倒れてメンバーに席へ戻される。

(二) チヤントの間。こう叫ぶ「神聖だ、神聖だ！ 偉大な全能の神！」カタレプシーの興奮状態で、聖堂信者席の後ろに立ち上がって倒れる。拳を握りしめて腕を動かし、だんだん静かに倒れていく。合計時間…二分。

(三) 祈りの前のハミングのチヤントの間。短い叫び声。激烈に腕を投げだす。支離滅裂なスピーチ。合計時間…一分三十秒。

(四) 説教の間。直立に立ち、強烈なシャウト…二秒。二十九秒間の声のないジェスチャー。突然、席に戻り、説教者の言葉へ注意を向ける。

(五) 説教の間…一回の大きな叫び声…0・五秒。

(六) 歌の間。声を伴わない激しい上下のジャンプ。財布を投げ捨てる。時間…一分四十秒。

(七) 祈祷の間。叫ぶ。一秒。激しい肩の震え、帽子を捨てる…十九秒。

(八) 説教の間。カタレプシー。聖堂信者席にこわばって背中をつける。二十秒間、激しく、しかし声は伴わない。すると腕は硬く伸ばされ、手のひらがこわばった状態で広げられ上げられる。倒れる。時間…三分。

(九) 説教の間。若い少女。通路を行ったり来たりして走る…三十秒。それから、静かにして説教台へ急ぐ…十四秒。祭壇の手すりのところで助祭に止められる。助祭の腕の中に倒れ、席へ戻る。合計時間…一分十五秒。

(十) 祈祷の後のチャントの間…激しい泣き叫び…十二秒。聖堂信者席を這って背もたれの上を進み、依然として泣き叫んでいる…五秒。三人の男性が席に戻そうとすると、歯を食いしばって声を出さずにあがく。彼女は水平に運ばれるがあがき続ける…一分四十八秒。激しさは収まり、どう猛な顔になる…二分。深い呼吸で落ち着く…二十一秒。

(十一) 説教の間。男性が静かに涙を流す…十九秒。「神よ！ 私の魂は清められた炎で燃えています」と泣き叫ぶ。立ち上がって六回まわる。助祭たちに外に出される。

(十二) 説教の間。男性が広範囲に両足で跳び泣き叫ぶ「ハレルヤ！」…二十二秒。彼の席に

戻される。力強く引きつける…一分三十五秒。静かに涙を流す…一分。完全に落ち着く。

訳者あとがき

ゾラ・ニール・ハーストン (Zora Neale Hurston, 1891-1960) の「シャウト」("Shouting") は、ナンシー・キュナード (Nancy Cunard, 1896-1965) が編纂した黒人やその文化を擁護するアンソロジー『ニグロ』(Negro, 1934) に寄稿されたエッセイである。ハーストンが実際に経験した体験に基づいて執筆されたエッセイで、彼女の民族学者としての活動が確認できる。

ハーストンはハーレム・ルネッサンスを代表する作家の一人で、一九七五年にアリス・ウォーカー (Alice Walker, 1944-) によって再評価されて以来、研究が一層深まってきている作家である。ハーストンは『ニグロ』に六編のエッセイを寄稿している。ここで訳出した「シャウト」はそのなかの一編で、『ニグロ』が初出である。

ハーストンは『ニグロ』への寄稿の依頼を一九三一年の秋に受けた。当時彼女は経済的に苦しい状況にあり、依頼を引き受けた。ハーストンが『ニグロ』に寄稿したエッセイは、黒人文化を詳述する内容であり、ハーストンにとっては民俗学者としての調査結果が出版されることになったものである。

「シャウト」は、アフリカ系アメリカ人の祈祷の一種について、ハーストンが取り組んだ現地調査のエッセイである。小説『彼らの目は神を見ていた』(*Their Eyes Were Watching God*, 1937)の作者として知られるハーストンであるが、その出版前の民俗学者としての活発な活動は注目に値するだろう。

最後になりましたが、翻訳の機会をいただき、投稿までお世話になりました水野尚之先生、編集長を務めてくださった牧野広樹さん、文芸表象論分野の院生の皆さんに、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

Hurston, Zora Neale. "Shouting", *Negro: An Anthology*, 1934, edited by Nancy Cunard, Continuum, 1996, pp. 34-35.